

『近世日本の都市と交通』
『近世日本の民衆文化と政治』

長谷川 成一

一

本年（一九九二）二月、渡辺信夫東北大学教授は還暦をむかえられた。渡辺教授の還暦をお祝いして河出書房新社より上梓されたのが、表題に掲げた記念論文集の『近世日本の都市と交通』（以下、『都市と交通』と略記）と『近世日本の民衆文化と政治』（以下、『民衆と政治』と略記）の二書である。この論文集の執筆に参加した三十五名は、一九五八年以降、東北大学文学部国史研究室に籍を置いて同教授の薫陶を受けた、いわば弟子筋に当たる方々と、現在東北近世史研究会のメンバーとして活躍している方々である。

本書をひもとく読者は、同教授が二書の編纂の労をとられただけでなく、『都市と交通』においてはご自身も論文を發表されていることをみて、同教授の本書に対する

並々ならぬ意気込みにまず驚かれるであろう。通常、還暦記念論文集とは、教え子達が恩師から受けた学恩を感謝し、最新の研究成果を披瀝するものであるが、右の二書はそれようないわば学界における常識をくつがえすものであって、同教授がまず率先して論文執筆を担当されるなど、還暦は一つの通過点であって、この時点における学問的な成果を確認して、教え子達とともに新たな出発点としたという、意欲的な願いが込められているように見受けられた。したがって収載された各論文の内容・レベルはともに、右に述べた同教授の願望をみごとに達成しており、このことから二書は今までの還暦論文集にはみられない、きわめて独創的な光彩を放っているといっても過言ではなからう。

以下、『都市と交通』『民衆と政治』の二書のねらいや、各論文の内容を紹介してゆきたい。

二

『都市と交通』の冒頭において、編者は同書編纂のねらいもしくは問題関心について次のように述べている。すなわち、わが国における「近世は都市の時代である」、と規定し、近世都市史の研究の立ち遅れを指摘するとともに、具体的には都市と都市との横の關係、都市と農村、それらを結ぶ交通・流通の在り方などを問題関心の中軸にすえて

都市史研究に取り組むべきではないか、との問題提起をしており、それに基づいて各論文は執筆されている。

さて本書は、Ⅰ、都市の構造と商業、Ⅱ、都市の社会と生活、Ⅲ、交通・流通と地域の三部から構成されており、バランスよく一八編の論文が配列されている。

Ⅰ、都市の構造と商業においては、編者の論文が冒頭に配置され、近世都市に関する基本的な問題が論じられている。以下、各論文の内容を簡単に紹介して行きたい。渡辺信夫「近世都市の基本問題―地子免除と町検地―」は、近世都市建設期における地子免除政策と町場において実施された町検地の性格を論じている。対象としたのは仙台・大坂・酒田などであり、各都市における地子免除策を再検討するといふもので、その結果、地子免除策は城下特定町人町の商業的な発展を促進し、また町検地帳は本質的には屋敷帳であって、町役負担者の確認にその目的があり、農村における石高による土地把握とは異なるものであると結論づけた。近世都市の今後の研究を深めてゆく上で、きわめて重要な指摘であるといえよう。若松正志「近世前期における長崎町人と貿易」は、寛文期から貞享期にかけて実施された市法貨物商法の時期の、長崎町人なかでも借家層の長崎貿易への関わり方について論じたものである。一七世紀後半に至って、長崎の町の運営や貿易への関わりかたに

ついては、従来の家持ち層から借家層をも対象とした政策に転換し、貞享令下においては、町人の貿易参加のうえで町の役割は減少したという。朴慶洙「仙台城下商人仲間の成立」は、仙台城下の株仲間成立については、「六仲間」の業種仲間を素材としてその成立過程を明らかにした論文である。そのなかで仙台「六仲間」が株仲間化するのには享保期に入ってからであり、制度的な成立は宝暦期に至る時期であるとす。安藤重雄「幕末における上方商業資本」は、大塩平八郎の乱の時代背景を、上方商業資本の成熟度、大坂における町方役人の意識、町方支配の特色、当時の幕政との関わりなどから説明し、大塩事件はまさに上方の地域に根ざしたものであり、従来の研究史の反省すべき点を指摘した。東海林静男「聯合生系荷預所事件をめぐる外交交渉」は、イギリス外交文書のなかから新たに発見した、明治一四年の聯合生系荷預所事件に関する、イギリス代理公使ケネディと外務卿井上馨との往復書簡を紹介して、当該事件の終末期の和解工作は、荷主、売込み商などの当事者をこえて、外交交渉のなかで和解・妥協路線が決定されたと結論づける。

Ⅱ、都市の社会と生活は五編の論文から構成されている。齊藤利男「越後府中と直江の津―中世都市の二つの顔―」は、文献史料と近年の発掘成果により、中世都市越後府中

の構造と景観を明らかにしようとしたもので、南北朝時代の守護上杉氏による都市改造で都市景観が一変したという。ついで中世都市の「葬送の場」に関する石井進氏の議論について、善光寺浜中世墳墓群を例に異議を唱えている。高牧實「港町酒田と祭礼」は、酒田山王社の神事祭礼の在り方と経営を論じたもので、三十六人衆による祭礼は、庄内藩の統制下におかれたとはいえ、酒田町組の町人達が神事祭礼の経営をあくまでも担い、頭人祭祀・当屋祭祀を根幹として続けられていたとする。小井川百合子「城下町仙台の工芸―堤焼と堤人形―」は、伊達治家記録のなから堤焼と堤人形に関する史料を集め、仙台城下における窯業の発生、堤焼・堤人形の成立の過程などを紹介。渡辺浩一「在郷町における町年寄・若者仲間・祭礼」は、奥州街道沿いの宿駅郡山を素材として、在郷町における祭礼と住民参加の分析を通じて住民結合の在り方を問題とする。在郷町における有力商人地主の存在感が増すにつれ、町支配の構造も変化を余儀なくされ、祭礼の運営にも多大の影響を与えるものであったという。荻慎一郎「鉾山町の社会生活―近世後期の院内銀山―」は、院内銀山のお抱え医師門屋養庵の日記から、主として天保十一年を取り上げ鉾山社会の日々の生活を描写し、また年中行事などを紹介したものである。さらに秋田藩領内における鉾山という特殊な社会

の祭礼や、鉾山行事に集まる人々の交流の在り方も明らかにしている。

Ⅲ、交通・流通と地域は、八編の論文から構成されている。伊藤清郎「道と信仰―羽州金峰三山を中心に―」は、羽州金峰三山信仰を民俗学など諸関連学問分野の成果を取り入れて総合的に検討したもの。出羽庄内地方における中世から近世にかけての山岳信仰を中世城郭、街道、海運、寄り神信仰などを素材として明確にし、神仏分離などの宗教政策が山々に及ぼした影響は大きく、信仰面だけでなく環境などにも深刻なものであるという。浪川健治「鉄と農具―一七世紀北奥の生産力発展と地域関係―」は、津軽領を中心とした北奥における鉄製農具の供給をめぐる、南部領鉄生産地との藩領をこえた地域関係が成立していく過程と、藩アウタルキーへの傾斜を強めてゆく側面を明らかにし、近世の農業生産、鉾業生産の発展との関わりを論じている。丸山雍成「海の関所と遠見番所」は、長崎の警備体制をはじめとして、近世国家における海辺警備体制や商品移出入の監視、運上収入について論じたもので、幕藩体制下においては対外的な警備は、長崎湊口の西泊・戸町両御番所を中心としてこれを補完する遠見番所を全国に配置して成立したことを指摘し、御分一家の重要性にも注意を喚起した。深井甚三「能登内浦の港町と富山湾岸地域流通

の展開」は、加賀藩の能登内浦地域の港町・浦町をとりあげ、これらの近世中期以降の発展は、越後をふくむ富山湾岸地域経済の展開によってもたらされたものであることを、各湊町の産業基盤や商品流通の分析から明らかにしている。横山昭男「近世舟運の成立と展開」越中小矢部川における――は、高岡木町を中心として展開した小矢部川舟運体制の展開と変質について論じたもので、木町舟方の整備過程、加賀藩改作仕法によって新田開発がなされてくるにつれて、こえ取り舟の抬頭など、河川舟運と当時における経済発展の在り方を素描している。渡辺英夫「利根川舟運における水戸藩の川船」は、水戸藩城付領の江戸廻米を中心として、物資輸送を担った藩船と小之字船について論じたもので、小之字船の江戸廻漕機能における役割を明確にしている。渡辺信「松前渡米と羽州幕領」は、幕末における羽州幕領からの松前渡米の実施過程を豊富な数字で明らかにし、江戸廻米・大坂廻米との関連にも触れ、その性格を論じている。原淳二「下利根川の改修――いわゆる『天保の水行直』について――」は、天保期に実施された利根川の浚渫策の実態を明らかにし、従来治水対策としては消極策とみなされてきた、「天保の水行直」についての研究史の見直しを提言している。

三

『民衆と政治』のはしがきにおいて、編者は、民衆史研究は地域性を抜きに概念的に理解されてきたところに問題点があり、民衆の歴史は地域に根差し政治や文化と密接な関わりがあることを理解する必要がある、と今後の民衆史研究の在り方に提言している。右の問題関心に基づき、民衆文化と政治について執筆した一八編の論文が本書に収録された。本書は、Ⅰ、社会と民俗、Ⅱ、地域と政治、Ⅲ、政治と理念の三部から構成され、前章で紹介した『都市と交通』と同様の三部構成である。

Ⅰ、社会と民俗は、六編の論文からなり、各内容は民俗学との関わりや社会史などの学問分野との関係の深いものが多い。藤木久志「村の指出――『上納と下行の習俗』再考――」は、中世若狭遠敷郡宮川庄の矢代浦における指出文書の解読を通じて、表題の習俗を説明しようというものである。既発表論文において、人夫役を勤めると台飯が下されるか公事に控除がつくという、中世公事体系を支える基本システムの見通しをさらに本論文において詳細に確認した。平川新「伝説・縁起・民衆――ヤマトタケル譚と刈田嶺神社の縁起――」は、奥州南部刈田嶺神社を対象に同社の縁起が策定される過程をとりあげ、ヤマトタケル祭神縁起を

中心とした検討をおこない、元禄期に吉川作縁起の入手を契機にヤマトタケルを主人公とした歴史が創作されたという。鯨井千佐登「子供の誓言と仕草―この世と異界の懸橋―」は、子供の誓言と仕草にはこの世と異界との境界をめぐる問題を内含しているとし、「ゆびきり」などの仕草を検証する。さらに誓言と仕草の聖なるものとの関わりを基礎づける要因として、VやX字形の秘めたる呪力に注目し、日本文化の基層をなすものと推定。大藤修「近世後期の親子間紛争と村落社会―名主家の日記から―」は、現静岡県御殿場市山之尻の名主を勤めていた滝口家の日記の分析を通じて、親子間の紛争に関する記事を取り上げ、幕藩体制下の家と村という枠組みの中の親子関係の特質、個人と家と村、三者の関係を明らかにした。柳谷慶子「近世家族における扶養と介護―『仙台孝義録』の分析から―」は、嘉永三年に成立した仙台孝義録の分析から、老人・病人・障害者などの社会的弱者の扶養・介護の担い手は家族員全員であったのが、幕末期から女性に負担を強いる社会風潮が生じてきたことを指摘する。現代的な問題関心に基づいた論稿といえよう。青木美智男「近世初期伊勢湾岸村落の家族と婚姻について（長文のため副題略）」は、尾張国知多郡師崎村の宗門改帳の数量的分析を通じて、同村の家族構成や婚姻、労働力移動の在り方を明らかにし、一七世紀半

ばには単婚小家族経営の確立を見たことを指摘し、漁村共同体の近世的な特質を検討している。

II、地域と政治は、五編の論文から構成されている。難波信雄「仙台藩民風改革とその背景」は、一九世紀初頭に展開した仙台藩の「民風制道」政策の内容とその背景を検討したもので、民風改革の問題は領主権力による民衆支配の後退や、諸市場構造の変質など幕藩体制の構造的な特質に突き当たるといふ。菊池勇夫「飢饉と施行小屋―宝暦飢饉・盛岡藩の場合―」は、宝暦飢饉の際に設置された盛岡藩の施行小屋の歴史的な性格を論じ、通常お救いの施設とのみ理解されてきた同小屋がじつは救恤と隔離という二面性が存在したことを明らかにした。守屋嘉美「文化期の盛岡藩政と民衆」は、盛岡藩文化改革の内容を分析し、藩主の専権政治、蝦夷地派兵問題と銅山経営をめぐる後期幕藩関係の変化などを論じ、失敗に至った改革の要因を明らかにした。今野真「近世前期の山論―出羽国由利郡真木山をめぐる争論から―」は、出羽国由利郡における本荘藩領と亀田藩領との山論をあつかったもので、近世においても農民間には自立的な山論の秩序と自力の世界が存在し、争論激化の背景には領主支配の在り方が問題として存在するといふ。佐藤憲一「ギリシャ正教の受容と地域の結社―佐沼頭栄会と広通社について―」は、明治初期宮城県内に広まっ

たギリシャ正教が果たした近代化とその状況を佐沼顕栄会の活動の分析を通じて明らかにしようとしたものであり、明治一三年の広通社の破綻と会の挫折を論じている。

Ⅲ、政治と理念は、七編の論文から構成されている。藤田寛「鎖国祖法観の成立過程」は、江戸幕府の対外関係を通信・通商の四方国に限定する鎖国祖法観の成立過程を一八〇一―一九世紀の政治動向を睨んで検討した論文で、レザノフへの申渡しにおいて祖法観は成立したと推定する。J・F・モリス「幕府法・藩法・給人の法―仙台藩の給人自身仕置権の制限過程に注目して、同藩の場合給人の裁判権が制限され、それは幕府に対する同藩自身の地位の低下を意味したという。齋藤銳雄「仙台藩の職制―『司属部分録』の成立―」は、仙台藩の職制に関する基本史料である司属部分録の詳細な検討をおこない、同史料は宝永年間に成立し延享期に追加があつて現在の形態になつたと推定する。寺田登「化政期の幕府代官―竹垣直清―」は、幕府代官を勤めた文人幕臣竹垣直清の日記から、同人の履歴、化政期における江戸文人との多彩な交流を紹介したもの。田中秀和「幕府の蝦夷地直轄」と宗教政策―蝦夷「三官寺」をめぐる―」は、幕府の蝦夷地政策と宗教政策との関連から三官寺の機能などを明らかにしようとしたもので、三官寺は蝦

夷地の和人死者の回向、国家安全などの祈禱、アイヌ民族の教化、ロシア人の応接など、祈禱と葬送の寺として位置づけられた結論づける。榎森進「日露和親条約と幕府の領土観念」は、安政元年に締結された日露和親条約に国境条文があることに着目し、両国の折衝の過程で明らかになつた江戸幕府の領土観を検討した論文である。具体的には唐太島を素材として、領土観の最大の特徴はアイヌは日本所屬の人民で、同民族の居住地は日本領という、その観念の内実を明確にした。青山忠正「開国と攘夷―外圧下の政治対立と国家に関する覚書―」は、安政から文久期の政治過程を刻明に追い、破約攘夷論とその破綻を論じ、破綻の結果攘夷から列強との「対峙」へと変化したという。

おわりに

以上、『都市と交通』・『民衆と政治』の二書に収載された各論文の内容を、紙幅の関係もあつて簡単に紹介せざるをえなかつた。筆者の専攻領域の狭さや問題関心の稀薄さから、充分なコメントができず、また誤解に基づく言及があつたとすれば、ご海容願いたい。このような論文集の場合、統一かつ最終的な結論を導き出すような性格の書籍ではないため、評者の側からアウトカウターの的に自説を表明するような書評は、勿論筆者の力量不足を割り引いた

としても、それは不可能であることをご理解いただけると考える。したがってここで申し述べるのは、二書を閲読して的印象的なものに止まらざるをえないのが実情である。

さて右の点を踏まえて、二書を読み返して見て気づくのは、収載された各論文がほぼ四〇枚前後の分量であって、歴史に関する学術論文としては、小品であるといえよう。最近とみに感じるのは論文がいずれも大作であるという点とであり、その規模に比較して内容が薄いのではないかというものが、筆者の独断と偏見に基づく感想である。このような風潮に対して、収載の各論文は、限られた枚数のなかにあつて、いずれも高い学問的なレベルと濃密な内容を保持しており、この点からも最近の風潮に警鐘を鳴らしているように見える。

二書の構成の点に目を転じると、前章ですでに紹介したように、都市と交通、民衆・文化・政治と、現在近世史の研究においていずれも問題関心の高いものばかりであり、編者の行き届いた配慮がうかがわれる。しかも細部の各構成においても、社会史に関わるものや民俗学との関連の深い論稿をそろえ、中・近世史研究者にとって必読の内容となつていることを指摘できよう。このことは、構成のみごとさと相俟つて編者のもとに集つた各執筆者の問題関心の高さを示唆するものである。地域的には東北・北海道に関

わる研究が多いとはいへ、紹介でも述べたように各論稿は、各分野にわたつて新鮮な問題意識に基づいて執筆されており、また問題提起的な内容もあり、江戸時代、もしくは近世史をこれから研究しようとする人々にとっては刺激的な書ともいえよう。

紙幅の関係から、これ以上の言及は慎むことにするが、最後に望燭の望として受け止めていただきたいのは、各論文に引用された史料の表記の仕方が統一的でなく、読点・句点の置き方もしくはそのありかたなどについて、評者なりに若干の不満のあつたことを申し添えたい。これは論文集という性格上、致し方のないことかもしれない。

二書に示された各論文の内容・学問的水準は、前述のように申し分のないものであつて、また問題関心の多様さ、新鮮な問題意識など、本書に示された各論点は見過ごすことのできないものであり、今後の中・近世史研究を推進する上で、まさにスプリングボードの役割を果たすものと考へている。還暦をむかえられた編者の渡辺信夫教授は勿論のこと、教授のもとに集つた各執筆者の、今後のさらなるご活躍を期待して欄筆することにする。

(河出書房新社 一九九二年四月刊)

A5判

『近世日本の都市と交通』四〇二頁

九千八百円

『近世日本の民衆文化と政治』四二六頁 九千八百円